「感性教育講座」開催の趣旨

小林　隆児
（感性教育臨床研究所代表）

はじめに

精神医学に操作主義的国際診断基準（DSM）が導入されてはや四十年以上が経過しました。DSM-Ⅲが生まれたのが 1980 年、私が精神科医になって５年目の年でした。当時の精神医学界は黒船襲来の如く大騒ぎとなり、瞬く間にわが国の臨床現場に取り入れられていきました。その影響は甚大なもので、今や臨床家の大半はそれを当然のものとして体得し、金科玉条の如く大切にしています。一言で言えば、症状を客観的なものと捉え診断する態度です。

しかし、今ではその診断体系が最新の神経生物学や遺伝学の知見と整合性をもたないとの理由から根本的な変更を余儀なくされようとしています。その中核にあるのは**現在の病態を複雑な遺伝・環境要因と発達の段階によって生成されたものとして捉える視点**です。子どもに限らず患者の病態を関係（遺伝と環境、病む当事者とそこに関わる人たち）の文脈で捉え、そこで起こっている事象の意味を発達過程の中に位置付けて考える視点です。子どもに携わる臨床家の真価が問われる時代となったと言えましょう。

母子ユニットで発見したこと

四半世紀前に、私は自ら創設した母子ユニット（Mother-Infant Unit）で乳幼児期早期の発達障碍を疑われる子どもを養育者との関係の相で関与観察するなかで、発達障碍にみられる多様な病像の生成過程を明らかにしました。診断の根拠とされる種々の病像は、けっして生来の脳障碍から直接因果的に生成されるのではなく、乳児期の養育者とのダイナミックな関係の相で生じるということです。そこでは独特な母子の関係病理が生まれ、子どもに強い不安と緊張が生まれます。子どもの病像（症状）はそれへの多様な対処行動だということです。「**現在の病態を複雑な遺伝・環境要因と発達の段階によって生成されたものとする視点**」で初めて見えてきたことです。よって、私たち臨床家の本来の役割は、症状に目を奪われることなく、その背後に働いている子どもの不安に目をむけ、いかにして不安を吸収してやるかにあることになります。ただここで厄介なのは、子どもの不安は無意識の層に潜在し、われわれはその対処行動としての症状に目を奪われやすいことです。

不安は関係病理「あまのじゃく」として表出される

そこで鍵となるのが子どもの潜在化した不安をいかにして把握するかという問題です。そのためには独特な関係病理を母子間、あるいは患者治療者間で捕捉することが必要です。養育者が子どもの相手をしようすると回避し、養育者が突き放そうとすると相手を求めるという屈折した対人行動をとるという独特な関係病理です。それを私は「**あまのじゃく**」と称してきました。「**甘え**」文化で育った私たち日本人だからこそ容易に理解できる独特な関わり合いの機微です。

（裏面に続く）

こころの動きを感じ取ることの大切さ

本講座のねらいは「あまのじゃく」と称する関係病理の実態を直接観察してもらい、行動のみならず、そこに展開されるこころの動きを実感してもらうことにあります。そこで私が試みているのが「感性教育」です。具体的には、乳幼児期の子どもと母親の関わり合い（Strange Situation Procedure、新奇場面法）の**映像を実際に予断と偏見なく見て**もらい、**少人数で互いに感想を自由に語り合い、尋ね合う**ことです。こころの動きは目に見える行動の背後に息づいているものですので、それを捕捉するためには、自ら当事者意識をもって感じ取るしか術はありません。「**臨床家の感性を磨く**」ことの重要性はそこにあります。

これまで客観性、信頼性、妥当性などの観点から観察のためのガイドラインが作成され、それに従って観察することが一般的でした。そこでは主観的な恣意性を極力排除することが推奨されてきました。しかし、本講座は**主観性**つまりは**自分が何をどのように感じるかを徹底して見つめる**ことを重視します。したがって参加者は自分のこころに素直に向き合うことが大切になります。

おわりに

以上述べたように、私はこれからのこころの臨床に従事する臨床家を育てるためにはぜひとも「感性」を育むことが大切だとの思いを確信するようになりました。そこで開催を思い立ったのがこの「感性教育講座」です。これから皆様とともにこの講座をみのり豊なものに育てていきたいと思っております。

本物の臨床家を育てる教育で最も重要な方法は上級医師の陪席だと確信している私ですので、本講座のように、リアルな映像をともに見ながらともに考える教育の大切さをご理解いただければ幸いです。

これまで本講座を開催してきて実感したのは、オンライン形式が本講座を開催する上で相応しいものであることでした。全国各地どこからでも、いつでも気軽に参加できます。ぜひ気軽にご参加ください。

参考文献

小林隆児（2017）．臨床家の感性を磨く―関係をみるということ．東京，誠信書房．
小林隆児（2020）．アタッチメント研究の死角．西南学院大学人間科学論集，15(2)；317-333.
小林隆児（2020）．自閉症の子どもとの出会いから五十年―私の臨床、研究、教育の歩み―．西南学院大学人間科学論集，15(2)；255-291.
小林隆児（2020）．関係発達臨床と私―臨床研究から臨床教育へ―．西南学院大学人間科学論集，15(2)；293-315.
（「西南学院大学人間科学論集」は南学院大学機関リポジトリから、あるいは論文タイトルで検索すれば容易に入手することができます）

令和 04 年 04 月 15 日